

青年海外協力隊マレーシア会

会報 第9号(50周年記念特集号)

発行 2016.2.25

青年海外協力隊マレーシア会第3回総会開催報告

青年海外協力隊マレーシア会 会長 白山 肇

第3回総会をKLで！と呼びかけて、去る1月11日にクアラルンプールで総会を開催することができました。

従来は過去2回、1年おきに東京で開催していた総会ですが、第3回総会は、協力隊事業発足50周年を記念しKL開催が可能かについて1年以上前から役員会で議論してきました。これまでの東京開催では、出席者が100人を超えた参集状況でした。KL開催では何人くらい参集してもらえるかが大きな課題でした。議論を重ねて行く中で、マレーシア政府とJICAマレーシア事務所共催で開催される50周年記念式典にあわせ、2016年1月に開催する案が現実味を帯びてきました。更に記念誌の発行も企画されるとのこと、そこで当会がこの2つの事業に側面から協力してはどうかとの結論に至りました。特に式典の参加が可能になればより多くのOB・OGの参加が可能になるのではないかと、役員達が協力隊事務局を訪問し、協力依頼等積極的に働きかけました。また、マレーシア事務所への挨拶、相談も重ね意思疎通に努めてきました。こうした実現に向けた準備と関係者のご支援・ご理解を得て本総会の開催に至りました。

私達OB・OGの参加者の中には、帰国後数十年振りに訪れた方々も少なくないと思います。また当時活動した赴任地へ立ち寄り、かつてのカウンターパートとの感動的な再会を果たした方、近隣諸国から参加していただいた方、遠くアメリカから参加の方、在マレーシア国内からの参加等々、50周年にふさわしい懐かしい顔そして顔が、赴任国マレーシアで会えましたことは、企画・実施致しました本会の最高の喜びとなりました。現役隊員との交流を通じた三世代の意味疎通もでき、今回の事業は、本会にとっても記念すべき歴史の1ページとして位置付けることができました。ご参加されました50名を超えるOB・OGおよび関係者の皆様に感謝申し上げます。

以下、総会・式典・現役隊員の間報告会の様子をお知らせいたします。

1. 第3回総会

日時：2016年1月11日(月) 午前10時30分～12時

場所：The Royale Chulan Kuala Lumpur

Executive Room

内容：41名の会員と同伴者5名の出席の下、司会進行を高橋明美



OG (S55.1 幼稚園教諭) が担当、白山肇会長 (S55.1 理科科教師) の挨拶で始まりました。議長に坂部修一 OB (S55.2 漁具漁法) が選ばれ、第1号議案(第Ⅱ期活動報告、会計報告)、第2号議案(第Ⅲ期活動計画案)、そして第3号議案(役員改選案)が議論され了承されました。続いて出席者の自己紹介の後、JICAマレーシア事務所の松本高次郎所長の講演があり、20年前のマレーシア赴任当時と現在とを比較し、現在の公共交通事

情の充実ぶりやマレー人の変わらぬ温厚さを熱く語られました。JICAは今何をやっているのか、そして今後はどうなるのかといった過去・現在・未来にまたがるいくつかの課題について言及がありました。

終了後、会場を同ホテル内の「ワリサン・カフェ」に移して昼食懇親会を午後1時30分まで行ない、柳沢 JICA 理事の挨拶に始まり、吉満博元駐在員の挨拶を受け、閉会まで和やかな歓談が続きました。

なお、総会で当日配布した資料（第Ⅱ期活動報告、会計報告、第Ⅲ期活動計画及び役員改選）、そして総会出席者一覧を参考資料として別添同封いたします。

2. マレーシア青年海外協力隊派遣50周年記念式典

日時：2016年1月11日(月) 午後3時～午後6時30分

場所： The Royale Chulan Kuala Lumpur
Taming Sari Grand Ballroom

内容：会員51名（同伴者含む）、現地在住のOB・OG、4～5名が参加、この他に日本から20名の（社）協力隊を育てる会視察ツアーも加わり、総勢250名を数えました。柳沢理事の開



会挨拶、ダト・スリ・アブドル・ワヒド・オマール担当大臣、宮川駐マレーシア日本大使、ダト・アラディン・ビン・ハシム元 FELDA 長官のスピーチ、そして草野忠征 (S40.1) OBによる初代隊員からのメッセージ等がありました。現役隊員のマレー語による「未来への言葉」や和太鼓翔の演奏の後、会食へと移り、大盛況の中、無事閉会となりました。

その後、午後7時から9時30分まで同ホテル内 Culan View で懇親の宴がもたれました。



3. マレーシア・ボランティア派遣中間報告会

日時：2016年1月12日(火) 午前10時00分～午後3時

場所： Corus Hotel 内会議室

内容：マレーシア事務所の定期的事業である「ボランティア派遣中間報告会」に22名の会員が参加しました。派遣中ボランティアのほかに、（社）協力隊を育てる会から20名、事務所関係者の参加がありました。午前の発表者には、現役派遣中の5名（2名はシニア）；高堀 英樹 SV (H26.3、学芸員、サラワク州立図書館文書館)、西中 純子 SV (H26.3、ソーシャルワーカー、ビドン OKU ワンストップセンター)、吉田 真由美隊員 (H26.3、日本語教育、マレーシア・日本国際工科院)、塚本 麻衣隊員 (H26.4、環境教育、廃棄物管理公社)、渡辺 明枝隊員 (H26.4、ソーシャルワーカー、スラヤン病院附属 Mentari Selayang) が赴任後約1年余りの活動についての報告。そして午後には、今回参加したマレーシア会から3名のOB・OG；原田 敏幸 (S40.1、野菜、セルダン農業学校)、吉田 曜子 (S61.1、日本語教師、レジデンシャルスクール)、荒木 薫 (S53.1、建築、モンフォート職業訓練校) が当時の活動を報告しました。



また、昼食時には現役隊員5名と帰国隊員5名との座談会が開催されました。

いずれの報告に対しても活発な意見交換があり、私達帰国隊員と現役隊員との貴重な交流の場として意義のあるものとなりました。

マレーシア会第3回総会・青年海外協力隊派遣50周年記念式典参加者の声

久しぶりに KL を訪問致しまして、懐かしい方々、初めての方々にお目にかかれ、とても充実した時間を過ごすことができました。KL でお世話になりました皆様、ありがとうございました。今後もマレーシアとご縁がありましたら嬉しいです。KL で皆様にお会いでき、楽しく興味深いひと時を過ごすことができました。ありがとうございました。今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

田中里美 (H2, 1)

東京ディズニーランドが開園された 1983 年、2 年 2 か月の任期を終えて、常夏の国マレーシアから真冬の日本へ帰国、あれから 32 年ぶりにマレーシアを再訪しました。



クアラルンプールは、東京同様の大都市へと発展し、電車、モノレール、高速道路が走り、32 年の月日の流れを実感しました。幸いにも、任地 Muar でホームステイさせていただいた家族と再会でき、嬉しさと懐かしさが倍増。さらに、配属先のボケーショナルスクールへも訪問しました。マレーシアの家族は、32 年前と全く変わらず暖かく私を受け入れてくださり、皆でマレー料理を食べながら話に花が咲きました。そして、あの頃を振り返り、私の協力隊活動はどうだったのか、長い年月を経た今、改めて考える時間を持つことが出来ました。

マレーシア会総会と 50 周年記念式典という行事があったからこそ再訪でき、発展したマレーシアをこの目で見て、半世紀という長い協力隊活動の意義を改めて考えさせられました。また、私にとって第 2 のふるさとであるマレーシアが、更に身近な存在となる旅でした。企画して下さったマレーシア会役員の方々をはじめ式典準備に携わった全ての皆様に感謝申し上げます。本当に有難うございました。



中沢麻里 (旧姓 持地、S56-2)

1 月のマレーシアでの協力隊創立 50 周年記念式典は、昨年より心待ちにしていたものでした。

3 年間のマレーシア国立オランアスリ病院での活動

を終えた後も、学会への参加、テレビ局の番組作成、友人・知人の家族の結婚式、昨年亡くなられた水木しげるさんのジャングルへの案内・通訳などでかなりの回数はマレーシアを再訪している。しかし、今回は特別の思いがあり、参加させて頂いた次第であった。

2020 年にはマレーシアは先進国の仲間入りを以前より掲げており、急速な発展を遂げてきている。リング



ットの安値など気がかりな点もいくつかあるが、先進国の仲間入りをしてしまえば、協力隊も必要なくなり、60 周年、70 周年などで OB・

OG たちが現地で集うことも無くなってしまおうのでは…という懸念もあった。

今回は、帰国の都合上、残念ながら 2 日目は参加できなかったが、2 日間にわたり、あれだけ立派で手際の良い企画をボランティアの運営ながら成功させた多くの協力隊 OB・OG や JICA の皆さんに深く感謝の気持ちを伝えたい。

今回の企画により思いを同じくしてマレーシアで活動した先輩・後輩の OB・OG 諸氏にも再会でき、またその方々が協力隊に参加できたことによってその後も活気に溢れた生活を送っていらっしやることに感激した。

協力隊への参加は、私にとっての人生における大きなターニングポイントであり、現地でお会いした諸氏にとっても同じだったと感ずることができ、参加できたことをつくづく誇りに思っている。



式典前の 3 日間は、第二の故郷といってもよい世界最古のジャングルとそこに住むオランアスリのセマイ族の村に 3 日間滞在して来た。私が活動していた時代だと共産ゲリラが潜伏していたり、自動車では容易に行ける道のなかった深いジャングルの村の近くまで道路工事が進みつつある。それによってもたらされるもの、失うものは数多くあると思われる。先住民のセマイ族の人々とわずか 3 日間ではあるが一緒に過ごせたことにより得られた心の平安の一方で、彼等の将来を案ぜずにはいられなかった。

北村豊 (S50-3)

協力隊50周年式典の多くのプログラムが無事終了し、ご苦労様でした。ありがとうございました。

1月13日休養を含めて、元派遣先、KLより40分のセルダン農業試験場及びセルダン農業学校を訪問し、風景の変化に驚くばかりでした。学校では5クラスの野外実習に参加し、女子学生17~20才の学生たちと記念植樹「原田バナナ」の植樹もできました。50年ぶりの農業試験場はデスクがそのままであり、50年ぶりに座ることができて感動でした。本当に50周年記念、本当に感謝しています。マレーシア国は、中進国より先進国入りは、すぐに来るでしょう。感謝します。ありがとうございました。

原田敏幸 (S40-1)

先輩協力隊員ばかりでなく、若い世代の現在の隊員にもお会いして、たくさん刺激を受け、元気をいただきました。いろいろ感心させられることが多かったのですが、一番印象に残ったのは、私がこれまで参加した行事や会議の中で、最もオープンで、グローバルな意識を持ち、バハサマレーシアだけでなく、英語もできる日本人の集まりではないか、ということです。日本語ができない主人も、10時半から夜9時過ぎまでという今までで一番長いパーティだったけど、新しい知り合いができて、行った甲斐があったと言っています。このようなすばらしい会を準備・開催していただき、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました - Syabas!!!

メットラー・陽子 (S48-4)

総会、式典共に、年次が違い初めてお会いするOB、OGの方々とも同じマレーシア隊員だったという共通点があるだけで話が弾み、すぐに楽しい時間になる、素敵な空間でした。もう少し自己紹介の時間が長くOGOBの方々の隊員当時と現在の生活が聞けたら良かったと思いました。



7年前のKLと比べて違いを感じたことは人々が以前より厳しい規律の中で生活をしているのではないかと思います。例えば、昔はタクシーの運転手の人が横暴で「ぼったくられてしまう」ような不安がありました。今はきちんとメーターが入っていました。

高速道路もETCのようなカードを利用していました。トイレもお金を払わなくても入れるところが多くなっ

ていました。またゴミ箱が分別になっていたことにはかなり驚きました。

社会がきちんとしてきたことは良いのですが少々残念に感じたことは、買い物をしている以前のように「負けてくれない？」という駆け引きがほとんどできなくなってしまったということです。路面の小さなお店でも「FIX料金です。」とあっさり切り返されてしまいました。

そんな中でずっと変わらないのはマレーシアの人達の人懐っこいおしゃべり好きなところでしょうか。気さくに話しかけてくれて日本人とわかると日本や日本人をととても褒めてくれます。やはりマレーシアが大好きだな、と感じる瞬間です。

河合恵子 (旧姓 大町、H18-3)

第三回総会及びマレーシア事務所主催50周年記念式典に家族で参加させて頂き、誠に有難うございました。3年の活動後、赴任先を再度訪問する機会がなく今回40年振りに訪れる事が出来ました。学校名・建物が変わっていましたが、校長・教員の皆様が暖かく迎えて頂き大変嬉しく40年前を思い出しました。「浦島太郎」になった思いです。今回の企画等の準備をして頂いた、事務局の皆様有難うございました。北山 武猛 (S48-1)



式典後、昔の任地トレンガヌへ。配属先のMARA事務所をたずねるが、知っている人は誰もいない。持って行った資料をだして話をしていると、そこはマレーシア、すぐに人だかり。昔のカウンターパートを知る人がいて、連絡してくれ、彼の家を訪問、懐かしい再会となりました。

高橋 勉 (S48-4)

感想は長いものは一部短くさせていただいたものもありますが、ほぼ原文まま掲載させていただきました。このほかにも参加できてよかったというお便りをいただきました。また、今後の開催についての提言等もいただいております。感想お寄せいただき、ありがとうございました。

青年海外協力隊マレーシア派遣の50年 (前編:1965~1987)

西暦	駐在員	調整員	局長	首相	マレーシアの協力隊のできごと / マレーシアの動き	協力隊事務局の動き
1965		K.L	K.K		マレーシア協力隊派遣取極め締結	日本青年海外協力隊創設、機関紙「若い力」創刊 第一次隊、募集、選考、訓練、一次隊壮行会
1966	(植原保一) OTCA			アブドル・ラーマン	マレーシア派遣第一次隊1月15日着任(5名:体育1名、稲作2名、野菜2名) 半島部はセルダン農業試験場、農業高校、青年スポーツ省、サバはサバ州農業局へ派遣 日本青年海外協力隊マレーシア事務所開設	当初OTCAの職員が隊員の受け入れに当たる
1967				アブドル・ラーマン	協力隊での初めての駐在員がマレーシアへ派遣される ASEAN結成	
1968	坂本喜久雄		篠浦公夫	アブドル・ラーマン	派遣中隊員数48名	東京広尾に協力隊事務局庁舎完成、広尾訓練所開所 サンケイ会館で初の帰国報告会、隊歌「若い力」発表 局内にTELEX設置
1969				アブドル・ラーマン	大規模な人種暴動、非常事態宣言 イギリス軍撤退(8/31)	「日本青年海外協力隊OB会」発足
1970		二瓶義宗		アブドル・ラーマン	この頃の職種は職業訓練、柔道、日本語が主 マレーシア隊員来日中のラーマン首相を表敬 皇太子・同妃殿下、マレーシア訪問 3度にわたり隊員とご接見 マレーシアで第1回アジア地区駐在員会議開催・篠浦局長、来マ この頃のKL人口60万	JOCVニュース、創刊
1971	松崎孝雄			アブドル・ラーマン	K.K.にはじめて調整員が派遣される。寺岡事務局長来マ	この年、沖縄返還
1972		草野忠征		アブドル・ラザク	K.L.(Jln.Nipah)とK.K.(Loyang)に隊員連絡事務所開設 これまで事務所は大使館内に、隊員連絡所は調整員住宅に併設 プミブトラ政策導入	
1973		小松征司		アブドル・ラザク		オリンピック記念青少年総合センターでの現地語重視の語学訓練開始 訓練期間が3か月から、広尾2か月、代々木2か月の4か月となる
1974			伴正一	アブドル・ラザク	田中首相東南アジア訪問、抗議運動が起きる	国際協力事業団(旧海外技術事業団)設立 「青年海外協力隊」に改称
1975	粕谷甲一	谷川与志雄	鮎川達	アブドル・ラザク	奥地前進主義で初めてFELDAに野菜隊員配属。(50年1次隊)その後、幼稚園・手工芸・保健婦などの職種もFELDAへ配属。 日本赤軍派によるクアラルンプール事件 この頃1マレーリングgitは100円	協力隊創設10周年 10周年記念映画「アサンテサーナ」制作・上映 協力隊募集の登録制度廃止、毎回出願方式へ
1976				アブドル・ラザク		県担当制 協力隊を育てる会発足
1977	金城光男	八林明生		フセイン・オン	黒河内事務局長来マ 福田首相マレーシア訪問	
1978				フセイン・オン		協力隊3部作発刊
1979		山口広治	黒河内康	フセイン・オン	派遣中隊員数63名	駒ヶ根訓練所開所 「若い力」が「クロスロード」に改題
1980	吉満博	草野忠征		フセイン・オン	54年4次隊で初めてFELDAに幼稚園教諭配属。~1991年まで47名が派遣 マレーシアOB、現地事務所スタッフ、アリフィンさんを日本に招待	
1981				マハティール・ビン・モハマド	協力隊事務所とJICA事務所の統合、(Jalan Ampang Hilirへ) FELCRAへの隊員派遣開始 ルックイースト政策がとられる	
1982		堀内清美	野村忠策	マハティール・ビン・モハマド	JICA事務所が Jalan Yap Kwan Seng の元日本大使館情報文化センターへ移転、隊員連絡所もNipahからJln.Amanへ移転	慰霊碑建立 皇太子・同妃両殿下の広尾訪問
1983	平澤昭男			マハティール・ビン・モハマド	アメリカ・ドイツがマレーシアへのボランティア派遣を終了	協力隊派遣隊員3年倍増計画 青年海外協力協会(JOCA)設立
1984		鈴木規子	数原孝憲	マハティール・ビン・モハマド	隊員連絡所Jln.AmanからJln.Damaiへ移転 レジデンシャルスクールへの日本語教師派遣開始 (~2001年7月、約96名派遣) ブルネイが独立、ASEAN加盟	広尾・駒ヶ根両訓練所、自己完結・同時訓練が開始 隊員派遣累計が5000名を突破 9月、広尾の事務局・訓練所が改築のため表参道へ仮移転 「海外開発青年」(現・日系社会青年ボランティア)制度開始
1985	八林明生			マハティール・ビン・モハマド	サバ州村落開発プロジェクトとして初めてのチーム派遣開始。59年3次隊で7名の隊員がサバ州へ(1984年にチームリーダーとしてシニアを派遣) 有田JICA総裁が鈴木元首相とともに来マ。隊員と会食	協力隊創設20周年 広尾訓練所改築 タンザニアバス事故
1986				マハティール・ビン・モハマド	マレーシアに村落開発普及員が派遣され始める この頃のKL人口120万	中国への派遣開始 ラオスへの派遣再開(11年ぶりの再開) ホンデュラス交通事故
1987				マハティール・ビン・モハマド	西マレーシア隊員数55名、東マレーシア37名、計92名	地方公務員現職参加制度(派遣条例)

20周年記念誌・35周年記念誌、クロスロード、JOCVNEWSなどを参照、情報収集したものをOBの視点で事務局でまとめました。
(会報10号で後編:1988年~2015年 掲載予定)

「胡椒の丸呑み」と5カ国、30年のコショウ人生

後藤 隆郎 (S40-1、稲作)

日本に「胡椒の丸呑み」という諺があります。コショウの粒を丸呑みしても何も感じません。しかし、歯で粒を噛み砕くと強烈な香りと辛味を感じます。このように物事はあらゆる角度から吟味しなければならないという意味です。私はコショウ栽培の体験からこの諺に出会いましたが、私たちの生活に必要な諺ではないでしょうか。

出生地と経歴

父が南洋庁に勤務していたので、パラオ島コロール町で出生。ポナペ、ヤップ、そしてパラオに移転。ポナペの記憶はなくヤップ島で幼稚園・小学校の記憶がある。最後の引き揚げ船で昭和19年4月19日、門司港(福岡)に到着。祖父母の居住する宮崎へ。そして高校を卒業、日大農獣医学部農業経済学科を昭和35年に卒業。7月外務省の海外実習として、ブラジル、パラ州モンテアレグレ試験農場および移住事業団ベレン支部勤務。

日本青年海外協力隊への参加動機

昭和39年、協力隊発足との記事を読み、今後、熱帯農業を続けるため経験が必要と思い応募した。

JOCVの活動

マレーシアサバ州コタベル農業省へ「水稻二期作普及」で配属。当初農家は保守的でなかなか水稻二期作の意義を理解してくれなかった。そこで田植えの試験後、運転手(バジャウ族でカダザン語も話す)に残った苗を与えたところ、すぐに家に持ち帰り田植えし、収穫しました。運転手が収穫したのをみて、日本式苗床を教えてほしいと村人が言ってきました。それが二期作普及の始まりでした。



その後の人生

以下のところで野菜栽培と胡椒にかかわってきました。特にインドネシア・マレーシアの12年間は、協力隊のマレー語が大変役立ちました。

1. 昭和44年インドネシア南スマトラでの「開発輸入」事業：日本とインドネシアの経済協力(アランアラン草原を畑にして、トウモロコシを繙種、収穫、日本へ輸出する業務)
2. 昭和50年、ジョホール開発：「スパイス農園」造成、ある香辛料会社とジョホール開発公社との合弁事業。2500ヘクタールに胡椒、丁字、ナツメグの香辛料を植え付け、良質の胡椒を生産した。
3. ペルー国のJICA熱帯作物専門家：1987年4月、プカルパ農業省へ赴任したところ、JICAから機材としてトラクターの案が提示されたが断り、鋤と鍬を要求、農業省で大変喜ばれ、フェスタが行われた。当時のペルー政府は経済的に困難な時期であり、トラクターでは運転手、サラリー、油等の経費が負担となります。また、胡椒栽培には、鉄木支柱と生木支柱の二方法がありますが、これらの方法の生産費、収益比較調査をした。その結果、生木支柱の方法が1/8ほど生産費が少ないと、生木支柱をペルーの農家へ技術移転、その他カムカムの普及もした。それをテロリストはみていたようで、“後藤には危害を加えない。胡椒栽培の技術指導を続けるように”とのテロリスト(センドロ・ルミノソ)からの伝言が門に残されていました。
4. ドミニカ(共)の胡椒開発プロジェクト：ドミニカ共和国の「コショウ開発計画」の収穫後処理の指導で短期専門家として赴任。貧しい農家のために生産費のかからないコショウ栽培に従事。

私はインドネシアの胡椒の体験から多くのことを学びました。それは長い歴史から生まれた慣習農法で理論のある方法です。

後藤さんからブラジル・ペルーの胡椒栽培者へのメッセージ

ブラジル・ペルーでは胡椒収穫、湯煎後、夜はシートに包むとしているが、湯煎後はそのまま涼しい所に置けば光沢のある品質のいいものができます。シートに包むとカビが発生しやすくなり、品質が低下します。胡椒は光沢、香り、辛みで価格が決まるので注意してください。

(送付いただいた原稿を事務局でデータ化・編集させていただきました)

<ボランティア総会を開催しました>OB・OGへのアンケート回答お礼と現役隊員の年に1回の

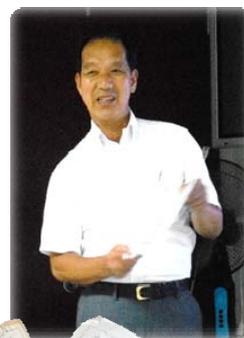
ボランティア総会の様子を送っていただきました。

平成 27 年 10 月 20 日（火）、21 日（水）、JICA マレーシア事務所にてボランティア総会を開催いたしました。

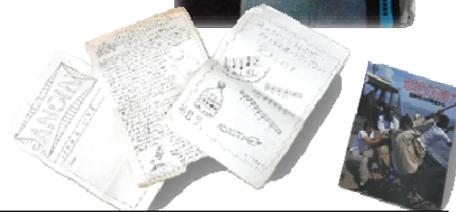


総会当日の午前中には任期の半分を終えた 6 名の隊員による中間活動報告会、午後は 50 周年記念アクティビティとして「ボランティアの原点を考えよう」を実施しました。アクティビティの中では、OV 前島さん(下写真)に活動当

時のお話を、調整員、JICA 現地スタッフから JICA ボランティアの変遷等についてお話をさせていただきました。その後、マレーシアの 50 年間の歴史やボランティアに関する資料、そして OV 会の皆様に協力していただいたアンケート等を使用し、過去 50 年間の年表を 23 名のボランティアで分担して作成しました。そこから見えてくるマレーシアという国の歴史とボランティアとの結びつきを知り、私たちボランティアが



活動をしていく意義を改めて考えることができました。今回、アンケートに回答してくださった OV の皆様、ご協力いただき、誠にありがとうございました。



前島さんコーナーには過去の ANGIN や貴重な資料が展示されました。



50 年間の内に派遣された全ボランティアの職種を年代ごとに地図上に表すと、マレーシアの発展とともに職種内容が大きく変わっていることが分かりました。



隊員の活動先である PDK や特別支援学級で作られたカラフルな福祉製品、サバ州のある村で作られた竹細工の工芸品の販売も行いました。



「青年海外協力隊発足50周年記念式典」

-感謝 ～そして未来へ-

開催される

2015年11月17日、横浜のパシフィコ横浜、国立大ホールで天皇皇后両陛下ご臨席のもと、青年海外協力隊発足50周年記念式典が盛大に行われた。2,000余名の帰国隊員を含む約4,500名の参加をえて、会場は満席



で大変盛況であった。マレーシアOB・OGの参加者は130余名だった。物故隊員への黙祷で始まり、式辞・祝辞のあと、初派遣国のラオス

首相のビデオメッセージが紹介された。

第二部は南アフリカのドラムで元気に始まり、「あなたの経験を未来へ」のテーマでパネルトーク、協力隊をモチーフにした映画「クロスロード」が、監督すずきじゅんいちさん（昭和60/2、モロッコ、映像）から紹介された。作曲者アンダーグラフを中心に11組のアーティストによる50周年イメージソング「ひとりひとつ」のライブ演奏があり最後は隊歌「若い力」を会場が一体となって合唱して、閉幕となった。



式典終了後、協力隊を育てる会主催の「祝う会」が開催され、JICA、各県の育てる会、そして20名のマレーシア帰国隊員を含む多くの関係者が参加し、協力隊発足50周年を一同でお祝いした。

また、JICAから関係団体に長年の協力隊事業に対する支援に対して感謝の盾が贈られ、マレーシア会もいただきましたので、ご報告致します。

北海道ミニ集会！

本年の6月12日（日）に北海道ミニ集会（札幌）開催を準備中です。詳細が決まりましたら、お知らせいたします。関心がある方は、後日、事務局までお問い合わせください。

グローバルフェスタ 2015 出展



10月4日、5日にお台場センタープロムナード公園でのフェスタに、マレーシア会も参加。K.L事務所から

来日していた Noorul さんも来場してくれました。

訃報

飯島克人さん（昭和57-3）

2015年9月

突然の知らせに深い悲しみに包まれています。これまでの活動に敬意を表するとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。

寄付のお礼・・・ありがとうございました！

坂田淑子（57.1 家政）OGより1万円のご寄付をいただきました。活動費として、大切にさせていただきます。なお、寄付は随時受け付けています。よろしく願いいたします。

振り込み先：

郵便局記号：10140 番号 51611341

（郵便局外から振り込みの場合：店番 018、
普通口座 5161134 です）

口座名義人：青年海外協力隊マレーシア会

代表 白山 肇

マレーシア会は国際協力サロン内に事務局を置きます。なお、この会報は青年海外協力隊マレーシア会会員と2010年の青年海外協力隊OB/OG会出席者にEメールもしくは郵送の形でお送りしています。配信を希望されない方はご連絡ください。また、会員は現在500余名ですが、まだ、会員登録されていない方には、是非マレーシア会のことお知らせください。

発行 青年海外協力隊マレーシア会 会長 白山肇
162-8433 東京都新宿区市ヶ谷本村町10-5

JICA 地球ひろば メールボックス 51

TEL：090-7186-1065（国際協力サロン）

MAIL：malaysia@ics-together.com

URL：http://ics-together.com/jocvmalaysia.htm